

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

あまのはし だて ず
—天橋立図—げんじつ くうそう
—現実と空想のはざままで—

むろまち 室町時代には、数多くの水墨山水図が制作されました。でも、そのほとんどは中国の風景、しかも実際には存在しない空想の景色を描いたものでした。例えば、相阿弥（室町幕府の唐物奉行、?～1525）の手になる「月夜山水図」はおそらく瀟湘八景（中国湖南省洞庭湖周辺の八通りの景観を絵画化したもの）のうちの「洞庭秋月」をあらわしているのですが、あくまでそれは画家のイメージであって、实景に基づくものでは決してありません。また松谿筆「湖山小景図」（図1）に一文を寄せる朝之慧鳳（東福寺の僧）は、この絵の景色を己がかつて旅した杭州西湖の光景になぞらえています。絵の中をいくら見回しても、西湖と特定できるような景物は見当たりません。松谿が描いたこの絵は「どこかはわからないが、きわめて風光明媚な中国の風景」にすぎないというわけです。

ところが、ここに取り上げる「天橋立図」（図2）はわが国の实景に取材しているばかりでなく、その威容を迫真性豊かに表現したものと高く評価されています。この絵の筆者は雪舟（1420～1506?）。そう、皆さんよくご存じの室町時代を代表する水墨画家で、初めて中国に渡った日本の画家としても知られています。その彼が八十歳を過ぎた頃、丹後の地を訪ね描いたのがこの「天橋立図」です。

絵を眺めてみましょう。中央には主役ともいべき天橋立が長く横たわり、その向かって左には文殊信仰で名高い智恩寺が見えます。また橋立の上方には阿蘇海をはさんでたくさんの社寺が林立し、その背後には高くそびえる山と観音霊場である成相寺が配されています。一方、橋立の下方にも海があらわされていますが、これは日本海に通じる宮津湾。さらにその宮津湾をちょうど取り囲むように描かれた、なだらかな山並みは栗田半島です。



図1 重文 《湖山小景図》松谿筆
京都国立博物館蔵

